

学名：*Hydrocotyle ranunculoides* ウコギ科 多年生草本



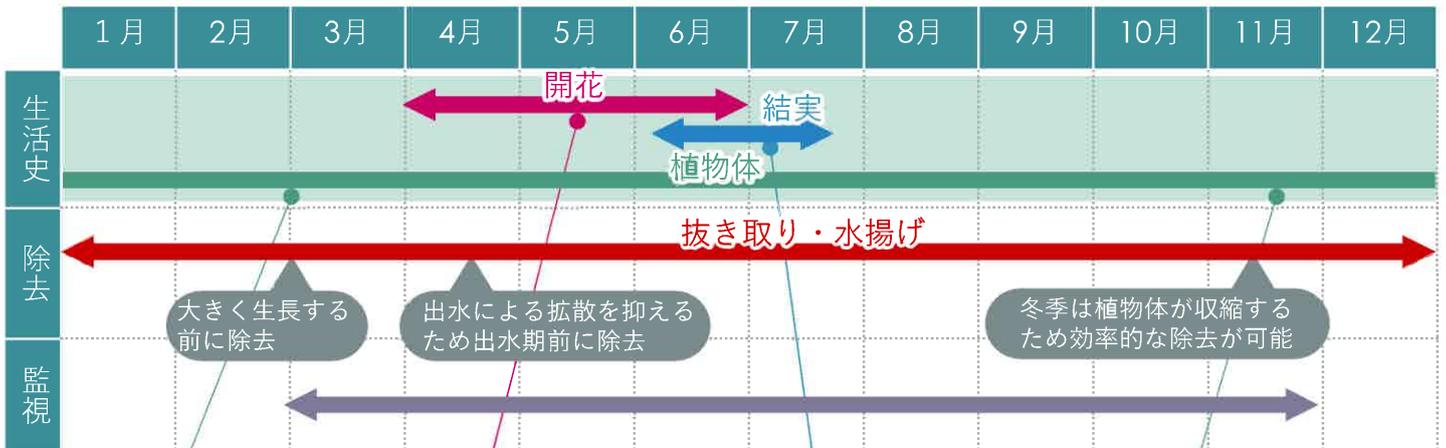
緊急対策外来種

大きさ | 横走り長いものは1m以上となる。
 河川の生育地 | 水際、わんど・たまり等 マット状に水上に群生する。
 繁殖 | クローン（ちぎれた植物体、根）、種子

影響

- 生態系** 水面を一面に覆うと酸素欠乏を生じさせ、水生生物の生息環境を悪化させる。在来生物と競合する。
- 治水・利水** 植物体が水門等の施設に堆積し、ゲートの開閉等を妨げる。枯死して腐敗すると、水質の悪化を引き起こす。
- 人間活動** 船舶やカヌーの航行阻害を引き起こす。

■ 除去・監視スケジュール



■ 日常的な監視

- ワンド状の止水環境や水際の流れが緩やかな環境に群生することが多いため、侵入状況を監視する必要がある。



ブラジルチドメグサの生育環境

■ 市民が参加できる対策

※類似環境に見られるオオフサモ、オオバナミズキンバイ、ナガエツルノゲイトウ、ミズヒマワリの項も参考となる。

①年間を通じた抜き取り・水揚げを行う

人手により抜き取り・水揚げする。本種はクローン生長を行い、ちぎれた植物体断片から再生する。このため下流への流出や取り残しのないように注意して除去する。



ブラジルチドメグサの抜き取り（菊池川クリーン作戦）

除去時の留意点※として、流出や取り残し防止のため、除去範囲や下流を予めオイルフェンス等で囲んだ上で除去を行い、フェンス等を寄せながら植物体断片を含めて撤去するとよい。根や茎が他の植物等に絡んでいる場合は植物をハサミ等で切り、絡んでいる植物ごと除去する。根付いている場合は表層10cm程度の表面の土も一緒に撤去する。

※「ブラジルチドメグサ除去方法（案）」（筑後川河川事務所）



オイルフェンスで囲んだ上での除去

②生えなくなるまで数年間続け、継続的に監視

本種の根茎は地中深くに入り込み、抜き取り時にちぎれやすいことから、単発の除去だけでは個体群の完全除去は困難である。このため、複数年にわたって対策を実施し、監視を続ける必要がある。

③湿地帯に放置しない

除去した個体を湿地帯に放置したままでは、地中に根を下ろして生育することもあるので、再生しないよう、処理する必要がある。

■ 河川管理者等による土木的な対策

①重機による水揚げ

ボート等を用い水際に集積し、スケルトンバケットやグラブ（掴み装置）を装着したバックホウ等の重機を用いて水揚げする。

オイルフェンス等で個体の拡散を防ぎ、冬季に衰退した植物体を除去すると効率がよい。



バックホウを用いた除去

②水草回収船による水揚げ

陸地からアプローチしにくい開放水面上では、水草回収船を用いて効率的に水揚げする。

補足情報

形態の類似した種



ブラジルチドメグサ
（外来種）（再掲）
葉：3～7cm以上、無毛
主に水面に繁茂



ウチワゼニクサ
（外来種）
葉：2～7cm、無毛
陸上を好む
葉柄は楯状につく



オオバチドメ
（在来種）
葉：2～6cm、短毛
陸上を好む



ノチドメ
（在来種）
葉：2～3cm、軟毛
陸上を好む